

小学校 Web サイトの活性化と継続的な更新のための小考察

白山市立明光小学校 正来 洋*1

学校 Web サイトにおける情報の積極的な開示が一般的になり、地域保護者等のステークホルダとの良好な関係構築に寄与している事例は数多い。J-KIDS（全日本小学校ホームページ大賞）などによる外部評価の機関が活発に活動を継続していることもその証左である。一方、学校 Web サイトによる情報公開の態様には大きな学校間格差がある。以下、事例をもとに学校 Web の情報発信頻度向上、継続的な更新体制確立のための留意点を考察する。

<キーワード> 学校 Web 校務情報化 情報公開 地域連携 校内人事

1. 実践の背景

学校 Web サイトの情報発信は、地域や保護者等への学校教育活動への理解と協力を深めるため必要である。その目的から言って、情報発信は可能な限り日常的かつ頻繁なものであることが望ましい。しかし、それには以下の問題点が存在する。

- ① サイト保守・ページ作成の煩雑性
- ② 情報発信の責任と担当の不分明
- ③ 担当者の異動等による引継ぎ問題

これら諸問題を低減することは、学校 Web サイトの継続的な活性化につながるであろう。

2. 実践の目的

上記問題点を解決するための方策を実際の学校サイトの保守運用の実態から見出し、その活性化と継続的な更新の要件を見出す。

3. 実践の方法

学校 Web サイトの継続的な活性化に成功した学校の事例を取り上げ、以下の方策がどのような変化や効果をもたらしたかを考察する。

- ① CMS 導入による更新の容易化
- ② 担当者の複数化
- ③ サイト継承のための校内人事

4. 実践の成果

2011 年度 12 月現在、N 小学校 Web サイトは「校長室だより」「学年のページ」を中心に週 2 回程度の更新頻度を維持している。

2007 年度から 2011 年度まで 5 年連続の J-KIDS 全国小学校ホームページ大賞の県優秀校（各県 9 校程度）受賞もしている。

2010 年度以降の担当者引き継ぎ後もサイトの活性化は維持されていると言ってよいだろう。

5. 実践の概要

①CMS 導入による更新の容易化 2005 年度

学校ホームページの更新頻度を上げることは以下の点から非常に重要である。

- ・ 更新されないサイトは閲覧者が定着しない。
- ・ 主たるユーザである児童保護者は、学校の日常の教育活動の情報を求めている。

旧来の HTML ページ作成、FTP アップロードによる煩雑な Web ページ更新、サイト管理者にとっては非常な負担であった。

しかし、近年は比較的容易に CMS（コンテンツマネジメントシステム）が導入可能になってきた。Web ブラウザ上から簡単に記事を更新できる CMS は負担を大きく軽減する。

事例として取り上げる K 市立 N 小学校では、2005 年 6 月に XOOPS による CMS を導入した。導入当初は Web 担当者による更新が主であったが、週に 5 回程度の更新頻度を確保できるようになった。当時の主たる更新コンテンツは以下である。

- ・「今日一枚」…学校のトピックを写真 1 枚とテキストで紹介。週 1～5 回更新。
- ・給食 Today! …当日の給食を写真一枚とテキストで紹介。週 5 回更新。
- ・カレンダー…学校行事予定。月一回の更新。
- ・ニュース…緊急情報やサイト更新情報を中心に、イベント発生時に随時更新。

従来の HTML 作成・FTP アップロードによるページ作成ではこの更新頻度を維持することは極めて難しい。CMS の導入により、更新頻度アップのコストを大きく低減し、日々コンテンツを複数維持することが可能となった。

*1 石川県白山市立明光小学校 教諭 masakage@beige.plala.or.jp

②担当者の複数化への取り組み経緯`05~`09

(ア) 担当者単独の時期 `05 年度

2005 年度中は Web 担当者による更新が中心で、他学校職員はページ更新に参加しなかった。

担当者以外の情報発信を促すために、2005 年 7 月に職員全員を対象とした CMS による学校 Web ページ更新の研修を行った。しかし、新たな更新を行う者は現れず、手立ては失敗した。

(イ) 管理職の更新への参加 `06 年度

2006 年度より「校長室だより」ページを設けた。校長が記事テキストと写真を担当する。

当時の校長が情報発信に意欲的で、更新頻度は月 6 回程度、サイトの主要コンテンツの一つとなった。「学校だより」でも学校 Web の URL 告知とともにサイト記事の紹介が行われるようになり、閲覧者は顕著に増加した。

管理職たる校長は、日常的に学校内を巡視し学校内の教育活動の全般を把握できる。その情報発信への仕組み作りは重要である。

(ウ) 学年のページの開設 `08 年度

2008 年度からは「学年ページ」を設けた。

学年のページは保護者のニーズに直結するが、学校 Web サイトにおいては、更新頻度の確保が難しい存在である。上記 2005 年度「CMS 研修」が失敗に終わったように、学級担任にとって学校 Web への関与は本務外という認識は強い。明確な責任分担がなければ、意識は高まらない。

そこで、それまで各学年に割り当てられていた「情報教育学年担当」に着目し、学年ページ更新を校務分掌として 4 月に明示的に提案した。月に一回以上という更新目標を提示し、更新マニュアルを作成、更新講習を OJT で行った。

2008 年度中の学年ページは月 1~2 回程度の更新が継続的に行われた。

(エ) 更新停滞への保護者の反応 `09 年度

2009 年度、主担当者が 6 年担任・研究主任兼務となりサイト更新頻度が当初大きく低下した。

結果、7 月保護者学校評価アンケートでこれまで高評価だった「学校の情報発信」数値が大きく低下、多くの保護者コメントが寄せられた。

この結果は 7 月職員会議に取り上げられ、校長はじめ各担当者に更新頻度維持のための体制

が再確認されることになった。

その後、学年担当者による更新がさかんになり、冬の保護者学校評価アンケートの評価も以前の水準に回復した。

サイトの保護者への認知の広まりとその重要性が職員にも強く意識される事象となった。

③サイト継承のための校内人事 `09 年度

2008 年度末頃より、主担当者の異動に備えたスムーズな引き継ぎが課題となってきた。2009 年度、学校長は情報教育担当を増員して 2 名体制とし、1 年間をかけて校内の情報化と学校 Web 業務の引き継ぎを進めるように指示した。

この間、校内情報システムの設定の伝達、システム運用の共同、CMS システムの伝達講習を長期休業中を中心に少しずつ進めたが、十分な時間はなかなかとれず、スムーズな継承が実現できるか確信が持てない状況であった。

2009 年度末に主担当者の異動が決定し、学年末休業中の一日を引き継ぎにあてた。ここでも十分な時間がとれたわけではなかったが、引き継ぎを受けた次期主担当者は、年度当初より意識は高く、実効的な引き継ぎのための時間の不十分さにも関わらず高い意欲を見せ、新年度のサイト更新も順調に行われていた。

これは、1 年間をかけてサイトの保護者への認知の高さと更新の様子を意識的に見てきたことによるものであると考えられる。

7. 終わりに

現任校の学校 Web サイトを担当し 2 年目に入った。CMS 導入や学校全体の意識向上の緒についたばかりである。担当者の孤軍奮闘にならないような支援体制が徐々に構築されていくよう、地道に実践を継続していきたい。

8. 参考文献等

○全日本小学校ホームページ大賞 J-KIDS

<http://www.j-kids.org/>

○日本の学校 i-learn.jp

<http://www.i-learn.jp/schools/>

○学校 Web サイト活用法 石塚丈晴・堀田龍也編著
2005 年 高陵社書店

○教育の情報化に関する手引 第 6 章 第 10 章

2010 年文部科学省